

老舍『小坡的生日』試論

渡 辺 武 秀

On Lao She(老舍)'s "Hsiao p'ò tē shêng jih (小坡的生日)"

Takehide WATANABE

概 要

“小坡的生日”是老舍一九二九年秋赴新加坡之后开始写的作品。据老舍说，他到了新加坡以后亲自看新加坡的现状发生了思想上的变化，由此抛弃一本当时已经写成四万多字的作品——“大概如此”。所以可以说是新加坡的新环境促使老舍写成“小坡的生日”这部作品。

这个作品里老舍试尝创造一个对小孩子最好最方便最理想的世界——小孩子的理想国家。这个创造理想国家的意义包括有对彼常识缠住的成人提出疑问，或者破坏常识的地方。对小孩子来说，他们觉得成人很奇怪。什么地方奇怪呢？人为什么那么拘于常识，不能理解他们的道理，虽然道理原来是非常、非常单纯的。作家完全肯定小孩子的道理与看法。结果，这个作品里小孩子的理想国家建立在破坏常识与既成概念之上。

在老舍以往的作品中从未看到这样的尝试。

序

この『小坡的生日』は老舍がシンガポールに滞在していた時、つまり1929年末に書き始められ、この地でお書き終わらない部分は、中国到着後、上海の鄭振鐸の家で書き続けられ完成したものである^(註1)。そして、1931年1月の『小説月報』第22巻1号から連載が始まり、この連載は同年4月の同巻4号で終了している。

発表順から見ると、この作品は『老張の哲学』(1926)、『趙子曰』(1927)、『二馬』(1929)に続く、第四番目の作品ということになる。ところが、創作のいきさつを述べた「我怎麼写《小坡的生日》」(わたしはどのように『小坡的生日』を書いたか)に拠ると、『二馬』の後に実はもう一本、作品を書いていたらしい。

私はシンガポールに着く以前にもう一つ作品を書いていた。ヨーロッパで書き、マルセ

イユからシンガポールに至る船のうえで書き、全部で四万字余りになった。だが、シンガポールに着き、私はそれを破棄することに決めた。本の名前を『大概如此』という^(註2)。

ではなぜこの作品を破棄したのか。前掲の文章に続いて、その理由が述べられている。これに拠って、簡単に言うと、シンガポールの社会状況、シンガポールの学生たちの思想の有りように触れて、老舍の思想が根本から変わったからだという^(註3)。

だとすれば、この『小坡的生日』は、老舍がシンガポールの現状に触れ、相当な衝撃を受けた後に書かれたもの、と言うことができる。

このような成立事情を踏まえ、私はこの小論で、この作品を、従前の作品群の流れの中で、従前の作品と違うのか。違うとすればその違いはどのようなものか、また違うとすればこの作品でどのような新しい試みを行っているのか等々を考えてみたい。

以前「作品の徹底的に分析し、作品全体のス

平成3年10月15日受理

* 一般教育部講師

トリー展開の中のどの部分にユーモラスな表現があり、それがストーリー展開でどのような効果を上げているかを考える」⁽²⁴⁾ という方法で『老張的哲学』『趙子曰』『二馬』の作品における老舎の特徴のようなもの述べた⁽²⁵⁾。今回もこの方法を手掛かりに『小坡的生日』を考察していく。

今回の考察を通してこの時期の老舎の試行錯誤のようなものが明らかになれば幸いである。

—

この作品は、おおよそ前半と後半に大きく分けることができる。

前半は小坡の視点から、シンガポールの社会現状、学生生活、自然状況、子供の遊びなどが語られて行く。

後半は後で述べることになるが、前半とは一変して「小坡の誕生日」当日の夜を境にし、小坡の夢の世界の話へと入って行くことになる。

まず、従前の作品と、この『小坡的生日』の全体的な印象から説き起こしたい。

この『小坡的生日』の導入の仕方は、従前の『老張的哲学』『趙子曰』のそれに酷似しているように思える。

『老張的哲学』冒頭では老張の「錢本位の三位一体説」と称する金儲けに対する哲学が、冒頭で長々とユーモラスに語られる。そして、さらに、老張の容貌が戯画的に描き出されている。

また『趙子曰』冒頭では趙子曰の住む「天台公寓」の状況、ここにまつわる故事、さらには趙子曰の名前の由来、果ては彼の容貌、性格がやはりユーモラスに長々と語られる。

後に更に詳しく検討するが、この作品においてもやはり、従前作品の連綿さに劣るもの、まず冒頭で、自分ではない、彼の妹の名前に対する疑問が長々とユーモラスに語られている。

これらの作品の導入の仕方に共通するのは、少なくとも、導入部分に「笑い」があるという

ことである。言わば、笑わせながら、読者を作品世界に引きずり込むのである。

しかし、従前の作品らとこの『小坡的生日』とは作品全体から受ける印象がまるで違うように思える。『老張的哲学』『趙子曰』の作品においては、笑いながら軽い気持ちで作品に入りながら、終わってみると、何かしら重い課題を背負わされて、作品世界を離れる経験をするのに比べると、この『小坡的生日』では、それらの作品にない、何かしら、すがすがしさのようなものが残るように思える。

この違いはどこから生じるのか。

これを考えるために、まず、この作品の冒頭部分からいささか詳しく見てみたい。

兄さんは父が大坡で国産商品店を開いたときに生まれたので、大坡と名前をつけられた。小坡自身は、父の店が小坡に移った後に生まれたからである。彼の名前は兄さんの名前ほどかっこよく、良い響きはないが、同じように根拠があり、何の疑問も生じない。だが、妹が生まれたときも、国産商品店は依然として小坡にあったのに、どうして彼女も小坡、或は小小坡、と名付けられなかったんだろう。それなのにあくまで仙坡と呼ぶのか？ 妹を呼ぶ毎に、疑惑はつもの。小坡は家族や学校などで近辺を旅行した経験やいろんな方向から探ったところによると、シンガポールの街には仙坡と呼ばれるものはない。ああどうすればいいのか！⁽²⁶⁾

馬鹿馬鹿しい取るに足らない、子供のたわごとのような疑問から「笑い」が引き出されている。しかし、この部分に於けるこの「笑い」で、小坡という少年の純粋無垢さ、天真爛漫さ、無邪気さがいかんなく表現されている。

そして、更に詳細に見ると、単に「笑い」のみを引き出しているように見えるこの部分も、決して何ら意味のないものでなく、もっと積極的の意味を持つように思える。

人には名前がある。これは当然のことである。だが、どうしてその名前があるのか、その名前でもなければいけないのか。この考えを推し進めて行くと、名前を極めて特別なものと思っていたものが、実は単に便宜的なものであるようにも思えて来る。その名前の本質は人と人を区別するところにある。だから、極端に言えば何でも良いのである。仙坡が小小坡でも、二小坡でも良いのである。小坡の、たわいのない疑問のようだが、作者は『子供』の視点を借りて、「常識」と考えられていること、或は「常識」では分かり切っていると考えられていることが、実はいくらか或は全く視点を交え「常識」と言われるものを眺めることによって、その「常識」が本当はいかに危ういかを示しているのではないか。この点を、更に具体的に見て行く。

二

この作品の主人公である小坡には、両親と、さらに兄と妹が一人づついる。家族構成から見ると、小坡は兄と妹の間にいるというので、両親の管理から比較的自由的な立場にいることがまず理解できる。

こんな彼に、二つの将来の夢がある。それは次のようなものである。

妹だけしか知らないのだが、小坡は二つの希望を持っている。一つは、入り口を警備するインド人（シンガポールでは少し大きな店であれば、みな一晩中入り口を警備するインド人がいる）になることであり、もう一つはマレー人の警察官になることである^(註7)。

まず、ここで注目したいのは、小坡の「将来の希望」の持つ意外性である。

シンガポールはいうまでもなく種々の民族によって営まれている都市である。従って、ここには様々な要因による根強い民族問題が存在していることは、この作品からも容易に察するこ

とができよう。そして、この地における中国人という民族は成功者であり、むしろ、インド人やマレー人より社会的地位が高いこともまた、この作品に「大人の話し」として書かれている部分から充分読み取れる。小坡の「将来の希望」がこのような社会を背景として出て来ているのである。このことを、まず押さえて置く必要がある。つまり、小坡が将来やりたいと希望しているのは、言わば弱小民族が行っている仕事なのであり、大人たちの「常識」からすれば、とうてい理解できない、意外な事なのである。

そして更に「常識」からすればもっと意外なのは、小坡がなりたいのは『インド人』の門番であり、『マレー人』の警察官であるという点である。この発想は、実は小坡の「民族の違いは固定的ではない」という考え方に支えられているのだが、意外なことに彼は自由に『インド人』『マレー人』になれると信じ切り、少しの疑いも持っていないのである。

これは、次の記述からも伺える。

彼は一つの宝物を持っている。それをどこで手に入れたのか誰も知らない。もちろんお母さんも妹もだ。この宝物は四尺ほどの長さ、五寸ぐらいの幅の、へりが擦り切れ、穴ぼこだらけで、色の褪せた、シワシワデコボコの赤い絹布である^(註8)。

これをどれほど大事にしているかが書かれた後、なぜこれが重要かの説明として、次の記述が続いて行く。

この宝物の使い道は一杯ある。頭にちょっと巻く、上に尖らせ下を円くして、頭の後ろに少し垂らす、そうすれば、彼はもうインド人である。たちどころに、顔も黒くなり、胸の上には一魂の毛が生える……（略）……この宝物を頭から取り外し、腰にちょっと巻くと、スカートになり、彼はもうマレー人である^(註9)。

小坡の「宝物」は『インド人』『マレー人』に変身する道具であり、そして小坡は、自分が民族間を自由に行き来できる人物であると信じて疑わないのである。この視点がユーモラスに描き出されている。そして、以下のように結論付ける。

人間の顔や身体はもともと自由に変わる事ができる。そうでなければ、小坡が赤い布を頭にちょっと巻き付けたとき、どうして顔の色が黒くなったり、鼻が少し高くなったように感じる事ができるのか？ いわんや街で会う子供たちは、顔の色は黒かったり黄色かったりするが、みんなマレー語を話しているではないか。(彼と妹もいつもマレー語で話している。)このことは、まさにみんなマレー人であり、後になって顔の色が少しずつ変わって来たこと証明しているのではないか？ またいわんや、校門を入るとすぐ、あのシンガポールの地図が見えるのだが、シンガポールは、もともと円くもなく、四角でもない、お母さんが機嫌の悪いときの作ったケーキのようなもので、このケーキには決して中国、インドなどの地名はないではないか。それに、お母さんはすぐ言う、自分と父さんは中国から来て、国産商品店の門番はインドから来たのだ、と。それは嘘じゃないのか、だってシンガポールの地図に、明らかに、中国、インドなんてないじゃないか^(註10)。

この考えは、民族は持って生まれたもので一生変わるものではないという『常識』からすれば、小坡の信念は、余りに突拍子であるが、彼自身はこの考えを信じ切って疑わないばかりか、一点の誤りさえ含んでいないと思込んでいる。だから、可笑しいのである。だがしかし、小坡の考えを眼の当たりにした時、民族偏見に囚われる人々がいかに愚かであるかを思わないだろうか。民族の違いなどというものは、小坡が言うように、なんら根拠のない、単なる外見

上のものかもしれない。小坡からすれば、彼の主張は真理であり、この真理は極めて簡単で、単純であるにもかかわらず、この真理を理解できない大人たちが不思議なのである。このような小坡の視点に接したとき、民族の違いや男女の差の呪縛から解き放たれ、自由で、すがすがしい世界に浸れるのではないか。

このように考えた場合、この創作方法は二つの効果を生み出しているように見える。

一つは、子供の視点を借りてもたらされる意外性、その意外性が含む可笑しさであり、もう一つは、子供の視点が様々な社会現象に向けられた時、その視点が意外である故に、かえってそこから反省が求められ、結果的に出て来る風刺的色彩である。

また更に、この変身できるという論法で、男女の差も説かれている^(註11)。小坡の考えからすれば、男も女も基本的には同じものなのである。

前述のような小坡の思想に基づき、この作品における子供の世界は作り上げられている。

例えば、小坡の家の花園で小坡が連れて来たマレー人の女の子が二人、インド人の子供が三人、二人が男の子一人が女の子、福建人の男の子と女の子、広東人の男の子で遊ぶ場面がある。

いくつかの遊びをするが、次の場面は「汽車ごっこ」の一部分である。運転手は広東人の男の子であり、切符売りはインド人の男の子である。外の者は皆乗客となるが、小坡の機転で女の子たちは優先的に前に置かれる。

汽車は更に遠く走った。マレー人の少女はスカートを捲り上げ、頭のうへの、小さく上にたばね髪を前のほうに突くように傾けながら、必死に走った。だがとうとうスカートが足に絡み付き、二人はいっせいに前のほうにドット倒れて、運転手の背中に突き当たった。後の乗客も、いっときに足を止められなかったので、おのずとみんな倒れて将棋倒しになった。でも、口にはまだ「ゴトンゴトン」と響かせていた。仙坡のおさげはマレー

の女の子の脚に巻き付き、踵はちょうドインドの女の子の鼻のてっぺんにのっかっていた。だが、そんなことにかまわず、口では前のように「ゴトンゴトン」と言い続けていた^(#12)。

ここには、既に民族の違いも、男女の区別もない。子供達がそれらを越えて「天真爛漫」「無邪気」に楽しく遊んでいるようすがユーモラスな筆調で描き出されている。

三

そして、更に注目したいのは、この作品では、この小坡は、批判を受けることのない、誰からも愛される、ほぼ完璧な人物として描かれている、ということである。

彼には外の人より何倍も堅い頭を持つという、身体的特徴がある。これは、インド人たちが頭に荷物を乗せては物を運ぶ方法を学び、これを繁用することにより鍛えられ、堅くなったものである。小坡はこの頭を人助けの為に使う。

母親が市場に買い物に行くときは、一緒に行って、この頭で荷物を運んでやるのみならず、次のようなこともする。

学校に行って、まず最初にすることは人と喧嘩を始めることである。もしあなたが小坡の喧嘩の大義名分を知ったなら、あるいは彼がひどい乱暴のものであるとか、平和を愛さないとか言わないだろう。小坡の喧嘩は、十回のうち九回半まで正しい道理を守るためであり、他人を守るためである。特に少女達、彼女達がいじめられたら、先生に言い付けず、いつも小坡の処に来て苦情を言う。小坡は低学年であるが、不公平な事を見れば、猛然と立ち向かう。敵の腕が電信柱より堅かろうが、敵の脚が鉄で出来ていようが、銅の鋳物であろうが構わない。やってやる！ つべこべ言うことはない！ 自分の腕力の強さ、体の大き

さに乗じて、人をいじめるような奴ら、ようし、とことんやってやろうじゃないか。小坡が必死になったときは、確かに恐ろしく強い。両手を一斉に振り回し、敵の注意を上を引き付ける。その実、目的は頭を敵の腹にぶつけることにある。おのずと、十回の内うまくぶつかるのは四、五回程度である。しかし、当たったがさいご、ああ！ 相手は三日の間、気分良くバナナを食べられない^(#13)。

更には通りを歩いているとき、次のようなことをする。

おばあさんが物を入れた籠を下げ、疲れて汗だらけになり、ふうふう喘いでいるのが見えた。小坡はちょっと見るなり、すぐ近付いて行って、何も言わず、籠を取り頭の上の置いた。

「どこに住んでいるの？ おばあさん」

おばあさんは小坡の様子を見ると、彼が心根の優しい子供であることがわかったので、喘ぎながら言った。

「広東学校のそばだよ。」

「よしわかった、僕の後からついておいでよ、おばあさん！」

小坡は籠を頭に載せ、手で支えず、専ら首のわずかな動きで、籠のバランスを保った。裸足の両足をピチャピチャ鳴らせゆっくり歩いた。というも、おばあさんが道を歩くのが大儀そうだったから、あえて速く歩かなかったのだ^(#14)。

これらの引用文に見られる、小坡の、このような善行から、小坡が殆ど理想的な人物として描かれていることも理解できよう。

小坡は学校の勉強は余り好きでなく、しばしば学校を抜け出すこともある。たが、不正を憎む正義感を持ち、弱気を助ける義狭心も持っている。困っている人には、優しい思いやりもかけることができる。しかも、子供達の中にあっ

ては、頼りにされるリーダー的存在であり、誰からも愛されている。

四

このように見て来ると、この段階で既に従前の作品との違いが明らかになって来ているように思う。

従前の作品群においては、戯画化、滑稽化からもたらされる「笑い」によって「天真爛漫さ」「無邪気さ」が出て来、そこに「憎めない」人物ができあがる。だが、結果から見ると、これらの人物たちは、「天真爛漫」「無邪気」に、罪のない人を苦しめる、という極めて皮肉な構図が浮かび上がる。

『老張の哲学』では、老張の金に対する妄信、趙叔母さんの先祖伝来の考えに対する絶対的な信頼など、『趙子曰』では、趙子曰の片思いからもたらされる愚行など、『二馬』では、メアリーなどの人物の無批判な人種偏見への信頼など、この、自分の考えを信じて疑わず、しかも一点の誤りもないと思っている彼らの姿が上述の構図により暴き出される^(※15)。

従前の作品群に於いては、ユーモラスな行動、言動をする登場人物たちは、結果的には、作者の批判を受けることになる。

ところが、この『小坡の生日』には、この構図が全くない。ユーモラスな言動、行動をする、小坡をはじめとする登場人物たちは、最後まで作者の批判的となることはない。

小坡の視点、発想は余りに意外で、突飛であるが、彼はそれを信じて疑わず、一点の誤りもないと思っている。この点で可笑しい。この「笑い」によって、やはり小坡の「天真爛漫」「無邪気」の印象も出て来る。だが、この小坡の「天真爛漫」「無邪気」な視点や発想は、他人を苦しめたり、他人に危害を及ぼすようにならない。これらは、子供達の日常生活の民族を越えた交わりから生れ出て来たものであり、むしろ子供達の世界の和を確固たるものにするものである。

つまり、この作品では「天真爛漫」「無邪気」これ自身が、そのまま肯定され、この作品にはこの「天真爛漫」「無邪気」を基盤とする世界が出来上がっているのである。

また、小坡の視点や発想が肯定されていることは、小坡が誰からも愛される、ほとんど完璧な人物に描かれていることにも窺うことが出来る。

この作品では、従前の作品とまるで違う方向でもって創作していることが窺える。ここでは、子供達の好ましい性格を肯定して、そこから作品世界を作り上げようとしている。また、ここには、人間本来の自然な姿、欲求に対する賛歌がある。これは従前の作品にはない。

この変化こそが、作者が小坡たちのような人物を生み出す環境、つまりシンガポールに遭遇したからなのであろう。

この作品で、小坡たち登場人物を観察すると、彼には全くの自然児であることが解る。言わば、シンガポールの社会環境が、この地の自然が、このような子供たちを、子供達の理想的な世界を育て上げつつあるのである。シンガポールには、男も女も平等で、種々の民族が仲良く暮らす素地があり、実際にこのような芽が育ちつつあると、少なくとも作者はそう感じていたのではないか。

つまり、この作品は「シンガポールの中国人」を批判することを意図するものでなく、「シンガポールの中国人の大人」、言わば本国の思想を依然として引きづっている中国人を越えた新しい勢力が育っていることを描くことに力点が置かれているのである。そして、新しい勢力による新しい社会の建設の可能性、或はその希望を暗示することこそ、作者がこの作品で行なおうとしている試みではないか。

この試みの動機は、今までいささか悲観的に見ていた中国民族がシンガポールで成功していることを、作者が実際に見たことと無関係ではあるまい。

この作品を読むとき、この視点で読むのが、最

も作者の意図に合うのではないか。
次に、後半部分を見て行く。

五

後半は、小波の誕生日に、家族全員で動物園に行き、夜は映画を見に行く、そして、疲れ果てて寝てしまい、夢の中に入って行く、この場面からである。前半部が、どちらかと言えば、ややスケッチ風であるのに比べ、後半部は展開に富み、物語性が濃厚である。

後半の物語りは、ごく簡単に紹介すると、以下のようなものである。

夢の世界にはシンガポールと影国の二つがある。シンガポールから、誕生日の夜に見た映画館の幕に映った映像の世界（原文では「影国」となっているので以後ここではそのままこの言葉を用いる）に小坡が入って行くことになる。

映画館の幕に、突然、映画で見た「おおあたま」の人物が現れ、彼が小坡を影国に導き入れる。この人物は、影国の人々には決まった名前はないので、自分の帽子の汗取りの部分に、「クーラーバッチ」と印刷してあったことから、クーラーバッチと名乗る。

このクーラーバッチには「鈎鈎」という愛する女性がいる。クーラーバッチの説明によると、この女性が、虎に背負われ、虎山に連れて行かれたという。そこで、小坡はクーラーバッチを助け、彼と共に鈎鈎を虎から奪い返しに行くのである。従って、この後半の物語りは、鈎鈎を救出するため、影国を動き回る、というものが中心部分となる。

ストーリーを、臨機応変に出される破天荒な影国の道理、「謎」めいたクーラーバッチの神出鬼没ぶり、「鈎鈎」という少女の正体にまつわる「謎」が結末まで引っ張る。そして、さらには影国の猿の王様になった学友との出会い、その関わりあいから狼との戦いに巻き込まれたり、あるいは最後に鈎鈎を救出する場面など、スリル

とサスペンスもある。

まず、後半の物語の最初の場面で、クーラーバッチと小坡の次のやり取りに注目したい。この場面においては、小坡は現実の世界の常識者である。この小坡の常識を、次々に覆して行くのは、影国のクーラーバッチである。そしてやがて、クーラーバッチの教えで、小坡は影国の常識をマスターしていくことになる。

「おまえが腰に巻いているものは、いったい何だい？」

「これ？」小坡はあの赤い絹布の宝物を指さし、言った。「ぼくの宝物さ。これがありゃどんな人になって意のままに変わるんだ。」

「早く捨てちまいな、おれたち、この国の人は、そんなものがなくとも意のままに変わるんだ、赤い絹布なんて必要ないね！」

「捨てられないよ、これはぼくの宝物なんだ。」

「おまえの宝物はもちろん、おれとは何の関係もない、捨てちまいな！」

「絶対捨てないよ！」

「捨てなきゃ捨てないでいい、もう話はやめた！」

「だったら、ぼくこれを捨てちゃおうかな？」

「捨てるな！」

「捨ててやる！」⁽¹⁶⁾

子供は往々にして大人がAと言えればBと言え、大人がBと言えればAと言う性格があるが、このような性格を利用し、子供らしさをうまく表現している。

既に見たように、『人は顔や身体を意のままに変えることができる』、これは前半では小坡の論理だった。この時、小坡の宝物は『「インド人」』『「マレー人」]に変わる』重要な道具であった。だが、もはやこの影国では、この道具が必要とされない。影国の人はもともと変幻自在、変わろうと思えば、何にでもなれると言うのである。このことによって、小坡の論理の根本思想に合致

しながら、これを更に飛躍させた世界が出来上がることになる。

だが、これも小坡の願望、さらには子供の願望でもある。この願望が影国では実現される。この作品では、実際に、猿になった張禿子という学友、猫に変身した小坡や彼の妹やインド人、マレー人の友達が登場する。この「変身できる」というのが後半の物語の眼目であり、種々のところに持ち込まれる。

では、影国とはどんな世界か。

外見はシンガポールと大差ないとしながら、次のような描写がある。

小坡が喉を渴いたので、クーラーバッチに、そのことを言うと、道の端に『水道』でなく『茶道』があるから行って飲めと言う。

小坡は木の後ろに行き、ちょっと見ると、果たしてその近くに大きな蛇口があった。それは深緑色で、まるでたった今ペンキを塗ったように見えた。近づいて詳しく見ると、蛇口に一对のピンクの宝石の蛇口があり、その上にそれぞれに小さな金のひねりがあり、『お茶』『ミルク』と、蛇口の上の小さな磁器製の札に書かれていた。蛇口のそばには緑の、漆で仕上げた小さなテーブルがあり、ガラスコップ、茶碗、砂糖缶が置かれていた。そして、真っ白なテーブルクロスには『無料』の二字が刺繍されていた^(#17)。

水道からお茶やミルクが出て来て、しかもお金も要らず好きなだけ飲める。このような設備は、この作品では子供の願望として出されるが、実は、人間誰しもが持つ願望のひとつである。このような設備のある国は、考え得る限りにおいて、最も好ましい国なのである。

また、いよいよ鈎鈎を救いに山に行こうとするとき、次のような小坡とクーラーバッチのやり取りもある。

「ぼくたちバスに乗って行こうか？」

「キップを持って来なかったよ！」

「バスに乗ってから買おう、きみお金ある？」

「おまえたちの処では、お金でキップを買うのかい？」

「それは当然さ！」小坡は理由は十分あるように感じた。

「どうして当然なんだい？ おれたちのこの国ではなあ、キップでお金を買うんだぜ！」

クーラーバッチの調子は非常に傲慢だった。

「バスに乗って、しかもお金もくれるって？」

小坡の眼は盃よりもっとマンマルになった。

「そりゃ当然さ！ でなきゃ、どうしてバスに乗ったりするんだい！ でも、残念ながらキップは持っていないよ！」^(#18)

この一連の会話の流れの中で、外にクーラーバッチの「お金は玩具さ、子供以外、お金を欲しがる人なんかいないよ！」(p.100)といった発言とか、或は、小坡の「品物を買うのに、お金は要らないの？」という問いに、クーラーバッチが「当然いらぬさ」(同上)といった発言が続く。

バスに乗ってお金が貰える。品物を買うのにお金が要らない。これも望ましい世界である。

また、これらの会話には「笑い」がある。

この場面においては、現実世界における「お金」と「キップ」の、それぞれが持つ役割や価値が、完全に逆転しているし、さらに、現実の世界では何にも増して重要視される「お金」そのものの価値を、影国の価値観で否定している。ここに「笑い」が生じる。つまり、「お金」「キップ」の持つ、現実世界の価値や役割と影国のそれが対比され、その結果生じる二つの世界間の逆転ぶり、ギャップの大きさに「笑い」が生じているのではないか。

ここでの可笑しさも、前半と同様、やはり「意外性」に求めることが出来る。そして、この「笑い」の意義は、やはり、「常識」、さらには「既成概念」の打破にあると言えるのではないか。こ

の場合、この打破の根拠になっているのが、影国の世界の常識である。

前掲の言葉の後、さらに、クーラーバッチは影国のやり方を小坡に教える。

店に入り取りたいものは何でも取ればいい。もしお金を払いたいまねをしたいんだったら、ポケットをさぐり、一枚の木葉でもいいし、一枚のタバコのカードでもいいし、或は一握りの空気でもいい、それを取り出しカウンターに置きな、それでお金を払ったことになるんだ。こんなことをやりたくなけりゃ、一声も出さず、品物を持って出ればいい。^(#19)

また

品物を盗むまねをしたかったら、物を持って、抜き足差し足で出ればいい、店の人にはみつかるなよ。^(#20)

という発言もする。

要するに、品物はすべて無料だということである。だから、品物を取る際に、いわゆるゴッコをしたければ、そうすればいいと言う。勿論これが影国のやり方であるから、店の人も何も言わず、この国には警察なんてないのである。

これまでで既に解るように、影国というのは、子供にとって、考え得限りの、最も好ましく最も都合の良い場所なのである。少なくとも、作者がそのような国を創造しようとしているのである。

作者は後半の冒頭で、「夢」について

ただ夢の中だけで、本当の自由を得られる。……（略）……夢を見なさい！ 子供たちよ！ 夢の中では君らは小さな羽根や生やし、トンボたちと同じように上に下に飛ぶことができる。君らは海に行き行って鯨たちがどんなふうに泳ぎ回っているか見ることができる。本当におもしろくてたまらない！^(#21)

などと述べている。

現実の世界という場においては、確かに子供の世界はいくら自由だと言っても、まだ、現実の制約を受けることになる。しかし、場が現実の世界から離れ夢の世界に中に入って行くと、もはや何ものにも縛られず、頭で考え得る限り、もっと自由に飛翔していくことができる。この結果、どのような好ましい世界ができあがるか。この実験を、作者は、この作品で行っているのではないか。

六

このように作品を分析してみると、従来失敗の一つに上げられていた、前半から後半への移行、或は前半と後半がほぼ半分の量では構成されている意味も明らかになるのではないか。^(#22)

前半の部分では、インド人、マレー人の間に横たわる「民族の違い」に対して、小坡は「人は変わるから、民族の違いなどあるはずがない」という見解で対抗している。そして、小坡の、この考えに基づき子供達の世界は出来上がっている。

これが後半になると、「人は変わる」というのが、影国の常識になり、子供が猿に変わったり、猫に変わったりする時の根拠になる。前半の「民族の違い」が消滅した世界である。この世界は前半より更に子供達にとって好ましく、都合の良い場所になっている。そして最後の、中国人、インド人、マレー人などの子供達が、同じ猫に変身し、鈎鈎を救い出すために協力する場面は、「民族の違い」を越えた一つの世界を象徴的に表したものの読み取ることもできる。

更に言えば、前半から後半への移行、つまり『子供の世界→夢の世界』の移行は、一つの世界の焼き直し、或は拡大と言えるかもしれない。作品分析でも明らかなように、『子供の世界』はシンガポールに育っている理想的な子供の世界であり、『夢の世界』というのは、子供の願望に

合った夢の世界である。つまり、この移行は、『現実の子供の理想的な世界→夢での子供の願望が実現された理想的な世界』と表現出来るものである。

ここには、テーマの一貫性もみられる。この作品の作品のテーマの一つは「民族を越えた子供達の大同の世界」であると思われるが、これを前半後半に見出すのは容易である。

そして、この作品の前半、後半通じ、作者は一貫して「常識」「既成概念」とでも言えるようなものを意図的にひっくり返そうとしている。確かに、これは時には強引で誇張に走り、単に「笑い」のための「笑い」を導き出すための手法のようにも見える。だが、執拗なこの態度に作者の主張が織り込まれているのではないか。人間は往々にして自分の住む世界が全世界と思ひ込み、この世界を支える「常識」「既成概念」を完全なもののように思いがちである。これは人間の陥り易い処であろう。この考えからは「民族の違い」「男女の差」がたわいのないものだということが見えて来ないし、それぞれの社会が持つ文化の違いも理解できないだろう。この作品は、この種の人間の欠点への警告として読むこともできるのではないか。

ともあれ、『子供の世界』『夢の世界』は、作者の一貫した「常識」「既成概念」のひっくりかえしの結果出現した「現実」とは「違う」世界である。

老舎という作家は、一つの作品の中で、作品の流れからすれば、ややもすると少し異質な感じのする場面を設定し、同じテーマを違う方向から捉え直そうとする試みをしばしば行う。この萌芽は、例えば、従前の作品『趙子日』『二馬』にある^(#23)。そして、以後の作品、『微神』は現実世界と幻想の世界を半分に分ける構成を取り、素晴らしい作品世界を作り上げている。この作品も、前半と後半に違う場面を設定し、同じテーマを違う方向から捉え直そうとする試みであると考えられるのではないか。

このような作品であるが、作者自身はこの作

品の出来に、いくつか不満を持っていた。

作者はのちに、実際に出来上がった作品が、作者がこの作品を書くに当たり最初に意図していた『シンガポールの中国人を本国の人々の手本にしたい』^(#24)という点から外れ、「後半は夢の世界であるが、シンガポールの事情を少しばかり諷刺してしまったとか」^(#25)とか「子供達と遊びながらついでに諷刺した」^(#26)などと述べている。

筆者には、この言葉は、作者の意図と彼の創作態度、或は創作方法との間に矛盾が生じ、その矛盾から作者本来の主張が歪曲して受け取られる可能性があることを示唆しているように思える。

作者の創作態度は「良い人にも悪いところがあり、悪い人にも良いところがある」^(#27)というものであり、従来の作品は、この態度が貫かれているが故に光彩を放っていた。

ところが、この作品では、この態度が、かえって裏目に出る可能性がある。

この作品における子供達の理想的な世界は、現実世界の「常識」「既成概念」と言われる、固定化されたもの打破の上に出来上がったものである。

理想的な国の創造が、多かれ少なかれ現実世界の「常識」「既成概念」の破壊の上に出来るものだとすれば、同時に、何等かの形で、必然的に現実世界に属するものの批判が出て来るのは当然である。なぜなら理想国はあらゆる「現実」を越えたところに存在すると考えるからである。だから、この創作方法からすれば、シンガポールを舞台にし、そこを「現実」にする以上、シンガポールを、この地の中国人を少しも批判しないで書くのは、不可能に近いのではないか。「現実」部分には、良いところもあり悪いところもあるからである。

だが、このようであればあるほど、つまり作者が「現実」を直視すればするほど、中華思想に凝り固り、多様な視点を持つことができず、謙虚に外国文化、外国人を評価することをしない

ような、読者である本国の中国人に、かえって、シンガポールを、シンガポールの中国人を軽視する口実を与えてしまうことになる。これは作者の意図しないところであるばかりか、非常に危険であり、作者はこのほうを心配しているのである。

また、作者の言葉の后者は、この作品の主人公が子供であることに関わっている。

作品を分析したように、子供の「天真爛漫」「無邪気」は肯定されている。だが、子供も、やはり「子供」であるから、「子供」の欠点を持つ。だから「子供」なのであり、これが「現実」である。余りに完璧で、理路整然とした言動、行動を取れば、「子供」ではなくなる。ところが、この場合にも「現実」を余りにも強く出してしまうと、かえって、子供たちの言動、行動が『子供のたわごとだ』『子供のことだ』『やはり子供だけのことしかない』と取られてしまう可能性がある。しかもここにも「シンガポール」の子供という点が絡んでいる。

当時の中国人読者の思考様式、作品の受け取り方を考えたとき、この作品が、このような危ういところに立っていることを、作者は知っていたのではないか。少なくとも、作者の言葉は、この時期、この点を危惧していたと解釈すべきではないか。

このような作品、このような創作方法が、中国人読者に有効であるか。この試行錯誤の果てに不朽の名作が作り出されるのである。

おわりに

今回、ここで取り上げたのは、『小坡的生日』のはんの一面であるが、この時期の老舎の新しい展開のようなものが、僅かなりとも明らかになったのではないか。

『小坡的生日』で行われているのは、従来の作品に見られる人間の弱点の摘出ではなく、子供にとって最も好ましく、最も都合の良い世界の構築への努力である。もっと一般化して言えば、

子供のユートピアを作り上げようとしているのではないか。この創作の方向は明らかに、老舎の、新しい未知の分野への挑戦である。

だが、この挑戦の出現には、必然的もあるようにも思える。

老舎という作家は、人間がいかに「常識」「既成概念」と言われるものに縛られて生きているかを充分知っていた。例えば『二馬』でも考察した「人種偏見」の問題のように、これが生じた原因はほんのたわいないところにある。或は、無責任な人物がこれを作り出したのかもしれない。だが一旦出来上がり「常識」のレベルになると、この「人種偏見」は一人歩きを始め、人間はこれに縛られる。いや縛られていることにも気付かないのである。こうなると、これを消滅させるのは容易ではなくなる。このメカニズムが『二馬』で明らかにされている^(註28)。

だが実は、このメカニズムも、基本的には、人間にとって最も好ましい状態がどんなものかの視点がなければ見えて来ないはずである。だから、この時点でも「常識」「既成概念」をすべて取り外し、それから自由な人間の姿を描き出す方向に行く可能性があったのである。この点で、既に『小坡的生日』の出現も前作に内包していたと言えるかもしれない。

この新しい試みの結果として生まれた『小坡的生日』であるが、いくらか欠点は持っているように思う。例えば、作者がこの作品で取った構成であるが、この作品では構成のメリットを十分に生かし切っていないのではないか。確かに、前半で出て来た材料を後半でまた取り扱ってはいる。だが、前半の物語で出て来たものが、後半でまた違った角度から掘り下げられ、作品全体に深みが出ているような印象がいささか薄い。前半で子供の視点からうまく処理した「民族」の問題なのに、後半では「民族」を越える際の衝撃のようなものが欠けている。そのせいか、子供たちの大同世界にもうひとつ説得力がないように思う。また、夢から醒めたところですぐ打ち切られる作品の結末部分は、前半との

関連が希薄で、終わり方としては余りにもあっけない。

また、『小坡的生日』の中で、夢の世界が描かれており、また小坡たちが猫に化けたりする場面を初め、猫についての記述も少なくない。この点から『小坡的生日』から『猫城記』への流れが指摘されることがある^(註29)。この指摘も興味あるが、『小坡的生日』と『猫城記』と関係とせば、次のようにも言える。『小坡的生日』が言わばユートピアを描き、『猫城記』はその反対である。つまり、この二つの作品は表と裏の関係になっている。もしかしたら、ここに技巧、発想の流れがあるのではないか。

ともあれ、老舎はシンガポールから帰国した。これ以後、中国で暮らし、実際に中国の現状を目の前にして作品を書くことになる。言わば英国で出来上がった作風が、シンガポールで一つの変化を見せた。更にこの後どのような展開を見せるか考えてみたい。(完)

注

テキストは『老舎文集2』を使用した引用分にページを示したが、これはこのテキストのものである。なお訳出に当たっては『老舎小説全集3』の『小坡の誕生日』を参照させていただいた。

- (1) 「書き初めてからこの地を離れるまで、少なくともまるまる四ヶ月はあり、この間に私は四万字をやっと書いた。これ以上速く書くのは無理だった。後の二万字は鄭西諦兄の家で補ってできたものである。」(「我怎么写《小坡的生日》」)
なお「我怎么写《小坡的生日》」は、もともと雑誌『宇宙風』第四期(1935・11)に掲載され、後に、この種の文章を集めた『老牛破車』(1937)に入れられ、最近では『老舎生活与創作自述』(人民文学出版)『老舎研究資料』(北京十月文艺出版社)に収められている。この小論では、『老舎研究資料』を使用した。
- (2) 「大概如此」の書名は1929年12月『小説月報』第20巻12号(書目文献出版)にも見える。この号の冒頭の目録に次いで、『小説月報』第21巻内容予告、つまり次年度の内容予告であるが、これがあり、ここに以下の記載がある。「(五)大概如此(未定)长篇创作,老舍著。老舍君的二马,今年刊登在本报上,博得了不少人的赞许。明年他又预定要写一部长篇小说“大概如此”。我们希望此作能够来得及刊登在第二十一卷的本报上。他的幽默的作风与流丽的笔调是读者们素所喜爱的。」
『小説月報』の編集部は、少なくともこの雑誌が出される一月前には何らかの形で、老舎が『大概如此』を書いている、或いは書いていたという情報を得ていたことになる。この記事からも、老舎のこの作品の存在を裏付けることができるのではないか。
- (3) 「シンガポールが私のこの本を軽蔑させた。シンガポールでは、ある中学で数時間国文を教えることになった。私が教える学生はみな十五、六歳の少年達だった。彼らが言うことや作文の時間に書くものは、私を驚かせた。彼らの思想の過激さや、知ろうとしている問題は、私が国外の学校にいた五年間にまだ出会ったことのないものだった。確かに、彼らはとても底は浅かったが、彼らの言動や行動を私には笑えなかった。英国で、私はとても過激な講演を聞いたことがあるし、専門にいわゆる危険性を帯びた書物のみを売っている店も知っていた。だが、概ねこれらの過激な言論も文字もただの宣伝であり、一般の人にはほとんど影響のないものだった。」等等とシンガポールで受けた衝撃を述べている。(「我怎么写《小坡的生日》」)
- (4) 拙論「老舎『趙子曰』試論」八戸工業大学紀要第九巻
- (5) 『老張の哲学』については、拙論「老舎『老張の哲学』私論」(『集刊東洋学』57)を参照。『趙子曰』については、(4)を参照。『二馬』については、拙論「老舎『二馬』試論」(八戸工業大学紀要第十巻)を参照。
- (6) 『小坡的生日』「一小坡和妹妹」p.3
- (7) 『小坡的生日』「一小坡和妹妹」p.6
- (8) 『小坡的生日』「二种族问题」p.10
- (9) 『小坡的生日』「二种族问题」p.11
- (10) 『小坡的生日』「二种族问题」p.14
- (11) 「おまえだって変わることが出来るんだよ。仙！もしおまえが男に変わりたいなら、毎日朝ご飯を食べた後、花園に行つて椰子の樹に向かって言うんだ、仙は男の人になつておいてね。そうすりゃ、おまえははだしいだいに父さんのようなあんな背の高い人になつてんだよ。」(『小坡的生日』「一小坡和妹妹」p.7)
- (12) 『小坡的生日』「四花园里」p.25
- (13) 『小坡的生日』「三学校里」p.45
- (14) 『小坡的生日』「九海岸上」p.62
- (15) (4)、(5)の論文を参照。
- (16) 『小坡的生日』「十二喇拉吧」p.92
- (17) 『小坡的生日』「十三影儿国」p.97
- (18) 『小坡的生日』「十三影儿国」p.99
- (19) 『小坡的生日』「十三影儿国」p.100

- (20) 同上
- (21) 『小坡的生日』「十二嗜拉巴唧」p. 89
- (22) 齊藤喜代子は『老舎小説全集3』の『小坡の誕生日』の解説で、構成について「一篇全十八章が第十章『生日』を中には喜んで前後その主題に一貫性を欠く結果を招いてしまっている」とか、「小坡の誕生日の最大最高の贈物として作者は彼に夢の世界を与えたことにより、この作品は焦点のぼやけたものとならざるをえなくなってしまった」と指摘している。
- (23) 『趙子曰』や『二馬』に、作品の流れから異質のように感じる部分がある。『趙子曰』については、拙論「老舎『趙子曰』試論」の「三」節を、『二馬』については、拙論「老舎『二馬』試論」の「二」節を参照していただきたい。
- (24) 老舎はシンガポールを舞台にして、本当に書きたかった作品について「我怎么写《小坡的生日》」で次のように述べている。「南洋の開発は中国人がいなかったらうまくいったらうか？中国人はとてつもなく大きな苦しみに耐えることができる。中国人はあらゆる苦痛を忍ぶことができる。毒蛇や猛虎が占拠するジャングルは中国人によって切り開かれたのだ。不毛の土地には中国人によって野菜が一面に植えられた。中国人は死を恐れない。何故ならどのように環境に対処し、どのように生きるか知っているからである。中国人は悲観しない。何故なら忍耐を知っているし、力を出し惜しみをしないからだ。……（略）……おのずと、彼にも多くの欠点や欠陥はある。だが南洋の南洋たる所以は、明らかに大部分は中国人の功績である。……（略）……どんなふうであれ私は南洋をこ
- う、中国人の偉大さを書こうと思った。」この後で、この壮大な計画は、緒々の事情で実現困難であり、結局子供を主人公にした作品を書くことになったと述べる。
- この文章の背後には、『状況からすれば決して生易しい処でなかったシンガポールで、実際に中国人が成功している、このことから考えれば、本国の中国が他国に遅れをとるのはおかしい。これは中国人という民族が劣っているからではなく、ただ中国人自身が自分達の能力を信じ死にもものぐるいで努力、格闘してないからである。この点で本国の中国人はシンガポールを学ぶべきである。』があり、この意図からすれば、シンガポールを、この地の中国人を本国の人々の手本になるように描かねばならない。
- (25) 「我怎么写《小坡的生日》」
- (26) 同上
- (27) 「我怎么写《老张的哲学》」
- (28) (5)の『二馬』について述べた論文を参照。
- (29) 齊藤喜代子氏は(25)で挙げた文章の中で、『小坡的生日』から『猫城記』の流れについて以下のように述べている。「夢の世界への逃避はいつの頃から手の中に入れたものなのか、いまはそれを探る余裕はないが、ここにはおのずとのちの『猫城記』へと続く一步の線が早くもすでに伏せられているような、そんな気がする。また、この書において、老舎は猫を巧みに語る。……（略）……ともあれ、夢と、また猫と、『小坡の誕生日』をのちの『猫城記』を用意する一篇の小説とみなしたとき、老舎の全創作上におけるこの一篇の比重はまた決して軽くないと認めらるものである。」